

企業と若者の交流事業

■ 企画概要

『企業情報発信サロン』

・若者や学生が先輩社員や経営者等の話を聴き、自ら発信して「気づき」を手に入れ、自分の働く意義について考える。座談会形式以外に、課題解決型などを実施。対象者を若者だけでなく、サポートする側の父母にまで拡げて実施。

『魅力発信講座』

・キャリア教育の一環として学校構内で、若手社員の方々が働く意義や楽しさを語る。相互型情報発信のため、ミニ座談会も組み込み開催。

■対象:大学生・若年者

- POINT -

若者の「気づき」を引き出す、少人数制での若者と経営者等の双方向の情報交換。

参加者と経営者の方々との「本音の語り合い」の場を設ける。

参加者による主体的な発信活動。



- 背景 -

- ・企業からの一方的な情報伝達ではなく、参加若年者が自ら自分の言葉で話をすることによって、双方向性のある情報交換と共有の場、若年者の「気づき」の場を作りたい。
- ・企業の経営者や先輩社員は仕事のプロではあっても、しゃべりのプロではないので、ジョブカフェスタッフがファシリテートすることにより、企業や職業の魅力発信に貢献したい。

- 効果 -

- ・『企業情報発信サロン』: 12回の満足度の平均は93.4%。

- 今後の展開 -

- ・「気づき」を得るというコンセプトを守りながら、内容の充実を図る。
- ・講師は県内人材を求める企業を中心に、学生とのマッチングを考慮にいれ選定し、企業のプレゼンテーション実施の舞台としても提供する。

企業と若者の交流事業

■ 企画詳細

【実施策】

☆つくには？サロン☆

知ってるつもりでホントは知らない「仕事」について、様々な業界で働く若手社会人を迎え、少人数で、ホンネを語り合う。

- 対象者：ジョブカフェ登録者、ミニセミナー参加者
- 参加人数：10名程度(実施内容による)

内容

テーマは「映像制作の仕事」や「保育士の仕事」など様々である。

その業界で働く若手社員を招き、サロンのような話しやすい環境で情報交換を行う。

なぜこの業界を目指したのか、やりがいや苦勞することは何かなど、聞けることも多くあるようだ。参加者は、仕事は色々あるけれど、地方ならではの業界の苦勞もあることなど、その実情を知る良い機会になったようである。みやぎジョブカフェで実施している「コミュニティサロン」の青森版。

2008年度実施日程とテーマ

会合数	日程	テーマ	参加者
第1回	5/20	映像制作の仕事～広告代理店	6人
第2回	6/12	美容師の仕事	6人
第3回	6/24	保育士の仕事	9人
第4回	7/22	フラワーアレンジメントという仕事	7人
第5回	8/26	会計・税務の仕事～会計事務所	9人
第6回	9/9	ペットケアアドバイザーの仕事	3人
第7回	9/30	寿司職人の仕事	10人
第8回	10/14	WEBデザイナーの仕事	10人
第9回	10/28	気象予報士の仕事	6人
第10回	11/11	社会にお金を提供する仕事～金融	2人

社会で活躍しはじめた先輩にいろいろ質問してみませんか？
今だから書える失敗談や、シゴトに対する想いなど、ここでしか聞けない貴重な体験談をうかがいましょう。
つくには？サロンに参加して「働く自分」をイメージしてみよう！

14日 火曜日

WEBデザイナーのシゴト

ホームページをデザインして形にするには、技術やセンスが問われます。けれど、ただパソコンと向き合うだけでは作れません。技術やセンス以外に大切なことってなんでしょう？

28日 火曜日

気象予報士のシゴト

さまざまな産業にとって重要な情報となる、天気。「いい天気」とはその人によって違うものです。大勢の人に、分かりやすく正確に情報を伝えるポイントとは、どこなのでしょう？

積極的に質問しよう！

ところ ジョブカフェあおもり
青森県観光物産館アスパム3階

とき 18:00～19:30 ころ

定員 10名
当日のお申し込みも可能です

いろいろなお話が聞けます

お問い合わせ 申請し込み
ジョブカフェあおもり つくには？サロン 担当：津田、横、前田
〒030-0803 青森県青森市宮下1丁目1-40 青森県観光物産館アスパム3階 青森県青年職業実践センター(ジョブカフェあおもり)
TEL 017-731-1311 FAX 017-731-1312 e-mail tuketake@jobcafe-aomori.jp
●ジョブカフェの事業実施に賛同のうえ、別途「アスパム」のeメールにて申し込みください。携帯電話からの申し込みも可能です。

<http://www.jobcafe-aomori.jp/>



企業の魅力体験事業

■ 企画概要

『企業の魅力発見！バスツアー』

・若者や学生が先輩社員や経営者等の話を聴き、自ら発信して「気づき」を手に入れ、自分の働く意義について考える。教育機関の学科単位、同学年単位などで訪問したい業種を選び、その業種においてリクルート力のある地元企業をバスで訪問する。座談会を組み込むことで、気づきを後押しする。課題解決型のインターンシップとして開催する、より実践的な企画も実施。

■対象: 大学生・若年者

■種類:

- POINT -

若者の「気づき」を引き出す、少人数制での若者と経営者等の双方向の情報交換。

参加者と経営者の方々との「本音の語り合い」の場を設ける。

参加者による主体的な発信活動。



- 背景 -

- ・企業からの一方的な情報伝達ではなく、参加若年者が自ら自分の言葉で話をすることによって、双方向性のある情報交換と共有の場、若年者の「気づき」の場を作りたい。
- ・企業の経営者や先輩社員は仕事のプロではあっても、しゃべりのプロではないので、ジョブカフェスタッフがファシリテートすることにより、企業や職業の魅力発信に貢献したい。
- ・表面上の情報提供でなく、生の現場に触れることによる情報共有をすすめ、職業選択のヒントにしてほしい。

- 今後の展開 -

- ・「気づき」を得るというコンセプトを守りながら、内容の充実を図る。
- ・訪問企業は県内人材を求める企業を中心に、学生とのマッチングを考慮にいれ選定し、企業のプレゼンテーション実施の舞台としても提供する。

企業の魅力体験事業

■ 企画詳細

【実施策】

☆青森県内企業の魅力発見バスツアー☆

教育機関の学科単位、同学年単位などで訪問したい業種を選び、その業種においてリクルート力のある地元企業をバスで訪問する。

工夫ポイント

- ・事前に魅力研究講座を実施するなど参加者が事前に訪問企業への理解を深めてもらう機会を設ける。
- ・企業に研修カリキュラム、見学コース等を用意してもらいアピール効果を高めている。
- ・社員食堂を利用したり、座談会を組み合わせたりすることで、生の企業の魅力に触れられるようにする。
- ・参加者の属性を絞り込むことで、企業の魅力発信のポイントが合いやすくする(企業の負担軽減)。

成功要因

ジョブカフェが企業と学校の間に入ることによって、学校と企業双方の負担を軽減し、双方にメリットがあること。

実施例

大学3年生の就職活動が本格化する時期にあわせ、「県内就職を希望する大学生等に県内企業の生の魅力に触れてもらう」という取り組みを実施。

実施時期;2007年12月～2008年2月までの
全10日間

協力企業;延べ26社

参加人数;延べ70人以上

～参加者の感想～

「今までホテルの仕事というフロントしか知りませんでしたが、掃除・厨房等の裏方の方の努力があり、社員全員のチームワークで成り立っているとわかりました。」

「『銀行は堅苦しい』というイメージがありましたが、接してみると明るく親しみやすい方々で、そのような社風に魅力を感じました。」

企業と若者の交流事業・企業の魅力体験事業

■ 実績詳細

【2008年度実施状況(11月10日現在)】

- ・『企業情報発信サロン』 : 計26回、延べ1,095人参加、協力企業415社
～つくには？サロン・青森中央学院大学トライアウト・青森県中小企業家同友会研究大会(テーブルディスカッション)への学生の参加・明治大学父母会就職懇談会など～
- ・『魅力発信講座』 : 計17回、延べ2,316人参加、協力企業47社
～青森市雇用対策室との共催する出前授業・八戸工業大学新聞の読み方講座など～
- ・『企業の魅力発見！バスツアー』 : 計6回、延べ124人参加、協力企業18社
～2大学合同課題解決型インターンシップ・青森職業能力開発短期大学校生対象ものづくり企業ツアーなど～



■ 企画ナレッジ・ノウハウ

- 他の地域で活用できるナレッジ・ノウハウ -

- ・講座形式とサロン形式(参加者と企業の方の直接の交流)を織り交ぜた情報交換の場の創造。
- ・ざっくばらんに情報交換が図れるよう少人数制での開催の実施。
- ・企業のニーズを絞り込み、企業ニーズに合致した・企業にメリットのある企画の実施。
- ・広報誌での取材者を講師に招くなど、事業間のシナジー効果を考えて企業選定・講師選定をする。

(担当者コメント)事業を推進するにあたり、他県の良い企画は躊躇せずパクリ、実施事業は成功失敗を隠さず公表するようにしています。おかげさまで、多くの支援企業に恵まれ「建前ではない、ホンネの情報を若者に提供できている」のではないかと感じています。青森県は決して恵まれた雇用環境にありませんが、「こんな大人になりたい」と若者が思えるような経営者や先輩はたくさんいます。たくさんの苦労や失敗もするけれど、働くことは基本的に楽しいということ、生きていくためには自分の足で歩いていくしかないことをこれからも若者に伝えていきたい、と思っています。

